

NEWS

SOKEN

2015.10

VOL.15

 青山学院大学総合研究所

AOYAMA GAKUIN UNIVERSITY RESEARCH INSTITUTE



Contents

巻頭言

- 2 ● 「宗教と科学」雑感
浅井 和春 総合研究所所長

特集 宗教と科学

- 4 ● 近代の忘却
——聖堂に息づく古き偶像たち
水野 千依 文学部教授
- 6 ● 宗教と科学
西谷 幸介 国際マネジメント研究科教授
- 8 ● “宗教と科学の対立”はいつあったのか？
中園 嘉巳 理工学部教授

私の研究

- 10 ● 今、世界の中で日本を研究すること
沖本 幸子 総合文化政策学部准教授
- 11 ● 独裁政治を比較する
林 載桓 国際政治経済学部准教授
- 12 ● 2015年度新規プロジェクト研究紹介
- 15 ● 総合研究所叢書新刊本紹介
- 16 ● 総合研究所研究成果報告論集紹介
- 17 ● お知らせ
2014年度研究成果(市販本・研究成果報告論集)
2015年度成果刊行プロジェクト
2015年度進行中プロジェクト
総合研究所施設利用案内
- 20 ● 編集後記

150th
140th

Aoyama Gakuin since 1874

「宗教と科学」 雑感

総合研究所所長
浅井 和春



今年の夏は、猛烈な暑さのため仕事もあまり捗らず、このところの急な涼しさにも身体が重く、なにか鬱々した気分なのは私だけでしょうか。栃木の鬼怒川水系をはじめ各地を襲った豪雨と河川の氾濫にも胸が痛みます。これから毎年こんな異常気象が繰り返され、さらに増幅されるとしたら心配にもなりますが、この『NEWS SOKEN』が皆さんのもとに届く頃には、秋の空の清々しさに改めて日本の良さを噛みしめる日々が訪れていることでしょう。

今年の夏は気象ばかりでなく政治の世界においても、私たちの今後を左右する大きな転換期を迎えたことは周知のとおりです。国会での圧倒的数の力——それが小選挙区制によるマジックの部分——が大きいことも自明ですが——、それを背景とした無理筋ともいえる法案の強行突破と、民主主義本来のあり方が相容れないことはいまでもありません。昨今の異常気象が地球や自然にたいする人類の驕りの帰結とするならば、このたびの国会多数派による法案成立も、同じく国民の大多数の意見を無視した驕りの産物とも思われ、将来的に私たちを不幸に陥れることにならなければと願うばかりです。

今回も『NEWS SOKEN』は盛り沢山です。特集では「宗教と科学」をテーマに、水野千依、西谷幸介、中園嘉巳の3先生から、たいへん興味深く、また本質的な内容の原稿をお寄せいただきました。また毎回、先生方のご研究の一端を紹介する「私の研究」においても、沖本幸子、林載桓の両先生から、現在のご研究を踏まえた素晴らしい内容のエッセイを載せていただくことができました。

特集テーマに「宗教」を柱としたのは今回が初めてということですが、キリスト教の精神を建学の礎としてきた本学にとっては、ある意味では避けて通ることのできないものとも思われます。宗教と科学は、古くより相互に密接な関係を有しながら、人類の歴史を刻んできました。が、やがてガリレオ・ガリレイ（1564–1642）の宗教裁判に象徴されるように、宗教の世界観や権威と自然科学の成果は、必ずしも共通の道を歩むものとはなくなり、むしろ対立する要素も濃くなって近代～現代にいたっています。自然にたいする認識が進むにつれて、科学は実証に基づく合理性を背景に独自の体系を築いてゆき、いっぽうで宗教は精神世界に重きをおくことで科学的合理性とは袂を分かった、とみることもできましょう。宗教が自然を超越した「神」を創造したり、人びとの生前世界や死後の世界を想定したりすることは、人類の高度な精神活動の所産であり智慧ともいえませんが、科学も経験的知識と実証によって抽象的かつ合理的理論体系を築くという意味で高度な精神活動にほかなりません。科学の発達が地球環境の破壊を現実のものとしている今日、改めて宗教と科学の精神活動の側面での共通性に目を向けるべきだと考えるのは、もはや少数意見ではないでしょう。

今年6月、ローマ法王フランシスコは膨大な量に及ぶ「回勅」を発表しています。以下は、7月5日付『東京新聞』に掲載された木村太郎氏による「太郎の国際通信」の受け売りですが、その「回勅」の中で法王は「地球はゴミの山になりつつある」と数々の自然破壊を指摘し、「このままだと

人類は前代未聞の生態系の破壊に直面するかもしれない」と、地球の「大絶滅」を予言したとのこと。地球はこれまで5度の「大絶滅」を経験しているといわれ、古くは4億4000万年前のオルドビス紀末に三葉虫など85%の生物が絶滅し、近くは中生代最後の白亜紀末に恐竜など70%が絶滅、その原因は超新星の爆発や小惑星の衝突などによるとみられています。そして近く、その6回目の「大絶滅」が、それも人類の活動が原因で起こるのではないかというのです。法王がこのような危機感を抱いたのは、それが他人ごとではない切迫した現実をカソリックの信者たちばかりでな

く、全世界の人びとに知らしめなければ、という強い使命感によることはいうまでもありません。そしてそれは、宗教の側からの科学への強いメッセージと受け止めることも可能でしょう。人類は叡智によって、今日のような快適な生活を一部で実現しましたが、にもかかわらずそれが足元から崩壊するとは、まさに皮肉でしかありません。

「宗教と科学」の問題は、引き続きさまざまな角度や方面から取り組まれるべきだと考えますが、今回はまずそのスタートとして、前記3先生の好論をお読みいただけたら幸いです。



近代の忘却 ——聖堂に息づく古き偶像たち

文学部比較芸術学科教授

水野 千依



フィレンツェで美術史を学んでいたころ、パウルで軽い休息をとり、美術史研究所に戻る道すがら、しばしば一人で立ち寄る聖堂があった。サンティッシマ・アヌンツィアータ、大天使ガブリエルから神の子を身籠るというお告げを受ける聖母に捧げられた聖堂で、大聖堂からセルヴィ通りを抜けた広場に佇む。前庭回廊には、盛期ルネサンスのアンドレア・デル・サルト、初期マニエリスムを代表するポントルモやロツソ・フィオレンティーノらのフレスコ画があり、当時の私にはトスカーナ美術の宝庫のひとつだった。

回廊の壁画を眺めながら暗い堂内に入ると、しばし目が眩む。車の行き交う埃っぽい街路の喧噪とはうってかわって、焚きしめられたお香の漂う聖堂のひんやりとした静寂に包まれると、信仰のない私にも、どこか心浄われる思いがしたものだ。堂内の暗さに少しずつ目が慣れてくると、壁画や祭壇を飾る絵画や彫刻を見ながら一巡するのが習い。だがこの聖堂には、長らくそうした私の目をかわす一隅があった。ファサードの内壁左に金属柵で囲まれた空間がそれで、いつも蠟燭が煌々と灯されているのだが、その中心、本来なら祭壇画のあるはずの矩形部分はたいい覆いで隠され、暗い闇に沈んでいた。いったいここには何が隠されているのだろう——。「何かがある」と思い、美術史の文献を繙いても、この位置に有名な芸術家の作品が存在するという情報は見当たらなかった。でも、きっと何かがある……。そんな思いを抱きながらも、そこに秘匿されていたものが、ずっと後に自分の研究テーマの中核になるとは、当時は想像さえしなかった。

ルネサンス期のフィレンツェといえば、大銀行家メディチ一族が政治の実権を握り、その庇護のもと、名だたる芸術家がしのぎを削って数々の革新をもたらした美術の黄金時代にほかならない。だが同じ時代、つくり手の名前さえわからぬ一枚の壁画が、国際的といつていいほどの注目と、人々の篤い信心を一身に集めていた。それが、この祭壇の覆いの陰に沈黙していたフレスコ画——《受胎告知の聖母》である。そこにかつて息づいてい

た信仰の世界は、一八世紀の近代化の流れのなかで姿を潜め、「美術館」、「科学的保存修復」と並ぶ近代の所産たる「美術史学」の合理性や実証性を求める言説においても、長いあいだ忘却されてきた。いつしか、そんな近代の忘れもの探しが私の仕事の一部となっていた。

聖母への奉仕と崇敬に身を捧げたフィレンツェの在俗悔悛者集団から発展し、一三世紀半ばに誕生した「聖母マリアの使僕会」が管理するこの聖堂では、一三六〇年代頃から、ファサード左内壁に描かれていた受胎告知の聖母像が数々の奇跡を起こすという現象を喧伝しはじめ、たちまち諸外国の著名人までが詣でる国際巡礼地となった。一三六一年、教皇イノケンティウス六世は礼拝堂を訪れる者に贖宥を認め、七〇年には祭壇が正式に聖別され、十四世紀末になると、聖母への奇跡の祈願や感謝から膨大な数の奉納物が捧げられた。一五世紀半ば、メディチ家当主ピエロが礼拝堂庇護権を得てこの崇敬をさらに強化していくなかで、公式の聖像譚が形成された。いわく、この聖像は「聖母に格別の崇敬を抱いていた慎み深く高潔で慈愛に満ちたバルトロンメオという名の男」が描き始めたが、「その御顔の真の肖像を素描することができず」、天使の手によって完成された。人の手になるのではなく、神意によって奇跡的に生成された、いわゆる「アケイロポイエトス（人の手によらない）」という地位を確立させたのだ。



芸術的には取るに足らない作者不詳の壁画が、信仰の領域では、いかなる巧妙な芸術家の手をも凌いで名声を高め、メディチ政権の庇護のもと、強力な奇跡力をそなえた像として認知されていく構図が浮かび上がる。さらに一四四八年、聖像を荘厳する大理石製テンピエットが完成すると、その周りに金属網が巡らされ、人々が聖像に近づくことが妨げられた。聖像は今や、重要な聖母の祝日や例外的な場合にしか展示されず、通常は秘匿される存在と化した。人目から遠ざければ遠ざけるほど、聖像の聖性は高まるという当時の思想が背景にある。

ところで、めったに人目に触れることのなくなった聖像の不可視を埋め合わせるべく、その奇跡力やアウラを可視化したのが、周りに捧げられた奉納物である。奉納文化はどの宗教にも見られる現象だが、ルネサンス期には特異な慣習が誕生する。目、耳、手、乳房、脚、ペストの病痕などの身体部位を蠟や石膏で型取りした解剖学的奉納物は古代地中海文化にまで遡るが、一五世紀になると、奉納者本人から型取りした蠟や石膏でできたマスクや手をつけ、本物の髪をそなえ、当時流行の装飾を身につけた等身大の奉納人形 (boti) が登場した。全身と身体部位とを等価とみなす「部分は全体 (pars pro toto)」という思想を背景に、信者の病んだ身体の断片は全身像と同じ奉納的価値をそなえたと考えられた。

こうして、蠟のハイパーリアルな質感も手伝って、聖堂は、王や君主や教皇から軍隊の長、修道士、平民、そして病者や罪人に至るまで、ありとあらゆる階層の人々の生き写しの似像が息づき、まるで「都市」や「戦場」、「墓地」にも見紛う様相を呈することとなった。集積された奉納像は奇跡像の潜在力を確証し、そのカリスマを高めた。他方で、奉納像は種類に応じて階層化された展示へと分類され、著名な人物の奉納物に優位性が賦与されることで「序列の競争美学」も前景化した。

型取りというオートマティックな手段に派生するこの種の像は、「芸術」の範疇からはこぼれ落ちる存在だが、それゆえに芸術家の模倣の技によって生み出される肖像とは異なる特異な力を見込まれたようだ。像主の身体部位の痕跡、抜け殻に基づく迫真的な似姿には、その人自身の人格が宿り、その似姿を通じてその人格は周囲へと分配され、聖堂内で自らの影響力を主張しつつ現前すると考えられたのだ。それゆえ本人の身代わりとして、神に捧げる犠牲の代替とされた。最後の審判において決済される救済、楽園追放以後、人類が失ったとされる神と

の類似性の回復を賭けた終末論的契約の担保、保証として、奉納像は一種の物神のごとく捧げられたのである。

こうして本人そっくりの生き写しの人形は、次第に人々に畏怖の念を引き起こしさえする、ある力を内在した、信者の存在をまさしく現前化させる像として聖堂での呼び物となった。その存在感たるや、やがては奇跡を起こす恩寵の聖母像を凌ぐほどの注目を集めることとなり、奉納像は新たな「聖堂内の偶像」と化した。名刺代わりに送られてくる国内外の貴賓たちの像は、それぞれの人格を継承しつつ、さながら「著名人ギャラリー」といった観を呈したが、その一方で、政情変化のたびにたちまち冒瀆の対象へと転じ、イコノクラスムさながら破壊的脅威に晒されることともなった。しかし鋳型が残っている限り、本人とのかつての一回限りの接触、痕跡が保証され、その人格を宿した像はあらたに幾度でも再生産できた。追放と復権のただなかにあったメディチ家にとって、死と蘇生を繰り返しつつそのアウラを再生産し散種し続けることのできる自らの痕跡を刻んだ奉納像は、権力の継承性、不死性を演出するほかならぬ視覚的装置だったのだ。

しかし、図像魔術ともいえる奉納人形は、今やすっかり姿を消してしまった。サンティッシマ・アヌンツィアータ聖堂には一六三〇年には等身大の人形六百体、張子の奉納物二万二千体、奉納絵三千六百枚を数えたが、時に梁から落下して信者たちを不安にさせたため、一六六五年、蠟人形専用の部屋を擁する「奉納物の回廊」へと移され、一七八六年には破壊された。メディチ家の消滅とロレーヌ家の台頭と時期を一にして、近代化と合理性を求める啓蒙主義の趨勢とともに攻撃の対象とされ、中世以来、フィレンツェの守護的象徴であった聖母像崇敬は力を弱め、同時に奉納文化も消滅していった。

この流れのなかで、奉納像の制作に専門に携わった蠟細工師たちも、「宗教」から「科学」へ、解剖学という学術的知の領域へと新たな活路を見いだしていく。奉納像という伝統的な領野を放棄しつつも、医師・薬剤師組合との関連を保ちながら、その奉仕する対象を蠟による解剖学用人体模型へと移行させたのだ。

近代に生まれた美術史学が無意識に前提としてきた概念や価値観ではすくい取れない、非合理や迷信の名のもとで忘却されてきたこうした歴史の古層を掘り起こすこと、それが、今の私の研究を貫く課題である。

宗教と科学

国際マネジメント研究科教授・大学宗教主任

西谷 幸介



「宗教と科学」の特集号ということだが、本総研研究プロジェクトによる成果として青山学院大学総合研究所叢書『21世紀の信と知のために——キリスト教大学の学問論』（新教出版社、2015年2月）の刊行を終えたところであり、それを意識しながらの論稿となる。そこでは「学問論の文脈における青学の教育方針の意義」という論文をしるさせてもらったが、以下はその中でブルームに拠りつつした一般教養教育と自然科学・社会科学・人文科学という議論を想起しながら、神学と諸学との関係について持論を述べさせていただく。主題に切り込む一つの視点と考えている。

ブルームは当該議論で、一般教養教育や人文科学が「全体〔としての真理〕に関する問いを問う」ことにおいて大学でのその存在理由を有し、とりわけ哲学が大学の「全体を見渡し…諸学問を構成し秩序づける」使命をいぜんとして果たすべきことを、示唆していた。この議論を参照しつつ、上記叢書では、青学はその建学の精神（「青山学院の教育は永久にキリスト教信仰によって行なわなければならない」）によってキリスト教神学による諸学の統合をその学是と決意している私立大学であることを、告げさせていただいた（ただし、このことは神学科再興というようなことを意味しない。肝要なのはむしろ宗教主任制度の充実であり、各学部・研究科における宗教主任各自の学問的研鑽である）。

この統合がとくに現在の総合大学に要請される前提として、そこで無自覚に拡がる諸科学の「統合性欠如」の状況がある。これは本プロジェクトによる3邦訳書（ティリッヒ『諸学の体系』、パネンベルク『学問論と神学』、ハワーワス『大学のあり方』）が共通に問題視した点であり、ハワーワスはそれでも現代の総合大学がかろうじて表面の一体性を保っているのはその「官僚主義的経営管理」によるものであると指摘した。それもまた「この世の知恵」として全面否定されるべきではなかろうが、大学の本質という観点からすれば、その生き生きとした一体性のためには、やはり学問的統合論が前面に出されてしかるべきなのである。本学にもその香りがより豊かに放たれていくことが望まれる。

科学とくに自然科学が19世紀半ばからのその成り立ちからして、「科学者」たちのマイノリティ意識においても、また彼らが自衛のために急ぎ組織した「専門学会」の形態においても、「本質的には排他的な性格を特徴とする」（傍点西谷）学問領域であることをつとに指摘していたのは、村上陽一郎『科学者とは何か』（新潮社、1994年）であった。こうした文化的遺伝子構造の事後的変更修正は簡単にはできないものである。

わが国の大学人が学問の本質理解の決定版のように持ち上げてきたヴェーバーの『職業としての学問』（1922年）も、当時の大学に圧倒的な印象を与えていた自然科学の威力を意識する中でしるされた歴史的所産であることは、よくよく承知されていなければならない。学問における「神々の競合」といい「価値自由性」といい、そうした雰囲気の中でこそ強調しえた概念であった。近代世界成立の原動力はプロテスタンティズムであるという見方において共同した親友トレルチも、ヴェーバーのこの学問論には与しなかった。近代人は冷徹な諦念をもって「^{ガイスト}霊」が抜け出た「鉄の檻」と付き合わねばならない、というヴェーバーの結論は、学問的判断というよりは彼個人の一種の美意識のように感じられる。一部の哲学者がそれに共感したとしても、神学者はそうはいかない。彼の祈りはつねに「^{ガイスト}み霊よ、来たりませ」だからである。

村上氏の上記著作が優れているのは、科学者集団の閉鎖的排他的性格の指摘に留まらず、それが「一般社会」に開かれた仕方での研究をもって責任的に対面すべきことを示唆した点である。氏はその否定的実例として、「核兵器の開発」とその広島・長崎での直後の使用という途方もない事態に直面して、科学者たちが集団として一定の倫理的判断や態度を取りえず、パニック状態に陥った事実を指摘された。さらに、その後、遺伝子組み換え技術とその危険性の問題が浮上した際、今回は原爆恐慌への反省に立ち、危険を事前に阻む国際会議声明を採択し、加えて、従来、^{インスティテューショナル・レビュー・ボード}各研究機関の評価委員会が学会メンバーの論文に^{ピア・レビュー}同僚評価のみを課していた内向きの原則を打破し、専門外の委員の判断を取り入れる画期的な

制度変更を行なった肯定的実例をも挙げられた。要するに、各学問領域による、学問全体への、そして人類社会全体への、開かれた態度の必要性を訴えられたのである。

大学における諸学の体系的（つまりは秩序立てられた）統合の課題は、たんに形式的整合性の問題に留まらない。それは人類社会が直面する真理や正義の問題の解決に寄与するための大学そのものの知的倫理的姿勢の事柄なのである。その意味で村上氏が核兵器の途轍もない危険現出にたいする科学者たちの恐慌を指摘して、個別科学の有限性の認識を促されたのは適切なことであった。人間は一学者も一その存在が根底から揺り動かされる出来事に直面しなければ、真剣に自己同一性確認に取り組もうとしないし、故にまたその真の確認もできはしないのである。東日本大震災の直後、ある地震学者が吐露された次の言葉は人間として誠実な告白であったと信じる。「地震の科学の無力さを徹底的に見せつけられた。…科学でわかっていることは自然界の中のごく一部だ」。

大学における諸学の相互関連づけによる一体化は、まさにこうした謙虚な告白と、自ら携わる研究は全体としての真理探求の「ごく一部」にすぎないという謙遜な認識により初めて可能となる。しかもそこに真理の全体は未決、未完結だという自覚も伴っている。従って、重大問題をめぐり一般社会にたいし大学が答えようとする場合も、その全学問領域を挙げて苦心して搾り出した立場表明となるであろう。しかし、それは研究者個人の回答よりもはるかに重みのあるものなのである。こうした点に大学の諸学統合の意義が存する。

さて、以上は、大学における諸学の統合という課題において個々の学問領域がいかなる姿勢を取るべきかという視点からの議論であった。では、青学で神学がその統合の役割を担うという場合、神学によるその自己理解とはどのようなものか。上述の叢書にも、ティリッヒやパネンベルクの著作に匹敵するような神学的な学問体系論などこの共同研究では示しえない故に、彼らの著作そのものを邦訳した旨を述べたが、以下では、それら2著の内容理解にも大いに役立つであろう、近年の神学的な「宗教」理解を紹介しておきたい。

それはソシュールの「共時的言語学」を出発点とする一種ポストモダンな宗教理解なのだが、キリスト教神学もこうした宗教としてのキリスト教の自己理解を深めているのである。それによれば、世界宗教と呼ばれるような宗教は例外なく立派な「経典」を有しており、「万事を内部のこととして、即ち当該宗教〔の経典〕によって解釈されることとして叙述する」。つまり、宗教とは現

実全体を「包括する解釈図式」なのである（リンドベック）。わが国の宗教学も同一のことをつとに次のように述べていた。「宗教はあらゆる人間の問題の解決に関わる」（岸本英夫）。ここに、青山学院がその教育研究全体をキリスト教信仰によって導く、と言う場合の、一つの思想的根拠が示される。青学で諸学の統合の課題がキリスト教神学に託されるという場合の理解も同じである。宗教は諸学も含めた現実全体を包摂するものなのである。

ここでただちに提起されるであろう問いは、現実全体と言うのなら、国家も含めてキリスト教が統御するのか、それこそかつての政教一致体制へのアナクロニズムではないか、という問いである。私たちが現代において首肯している民主主義憲法の政教分離原則はそれこそプロテスタント・キリスト教による歴史的所産である。そして、誤解されてならないのは、この原則下ではたんに個人のみならず中間団体にまで信教の自由は認められているということである。「中間団体」（デュルケム）とは国家・政府と個々人との中間に位置する「ヴォランティア・アソシエーション」のことである。ここに青学が学問研究及び教育の団体としてそのキリスト教的な建学の精神を掲げうる根拠がある。青学は自由なキリスト教私立大学として、その独自の創造的な教育と研究の成果を、そこに学ぶ者たちの人間性陶冶のためにも、また国家の健全性維持のためにも、生かす使命を帯びているのである。



“宗教と科学の対立”はいつあったのか？



理工学部教授

中園 嘉巳

はじめに

現代のわたしたちの多くが疑問の余地のない史実として受け止めてしまうほど、言い慣らされた言説の一つに“中世における宗教と科学の対立”がある。しかしながら、これが史実として成立しているのかどうか、を改めて問うと、そこには多くの矛盾と歴史認識における根本的な瑕疵の存在を否定することができない。例えば、宗教改革以前に人々が教会あるいは自宅で聖書を読んで学ぶことはあり得ない。即ち中世期カトリック社会においては、数少ない知識人（聖職者）のみがラテン語訳聖書を読むことができた。彼らは庶世の人々と交わることなく聖書を学び研究していた（中世神学）。

時代は下り、16-17世紀の変革期を経て西欧社会は大きく変貌する。キリスト教は地域国家ごとに世俗権力が主催する統治のための国家宗教となり、このときから人々は、国王が編纂し注釈・解釈が加えられた翻訳聖書を読まされ学ばされるようになっていったのである。つまり、近代以降になってはじめて、一般の人々は（翻訳された）聖書を読めるようになり、その結果翻訳聖書の記述と自然哲学者の言説との間の齟齬を取りざたして、一般庶民を巻き込んでの神学論争という社会的騒動が生じるようになっていった。これは、国教（国家宗教化されたキリスト教宗派）による抑圧下に、民度がある程度成熟した民衆が存在した18世紀後期以降でしか起こりえない事態であった。

本稿では、“宗教と科学の対立”というとらえ方がどのように生まれ、どのような経緯をたどってきたかを概説する。

1. 発端（17-18世紀）

近代以前（いわゆる中世）を科学的な無知と迷信に囚われた時とみなす見解の初期の提唱者はフランシスコ・ベイコン（1561-1626）であり、さらに1世紀後、ヴォルテール（1692-1778）がこの見解を強化していった¹⁾。当時の英仏を代表する思想的権威の影響力は著しく、彼らの見解は、その是非が顧みられることなく定説化して

いった。

17-18世紀、英仏においては時を同じくして、集権的世俗権力が行政官僚組織を整備して、領民に対して抑圧的な国家体制（近代国家）を組み上げていく。その際、統治上有益であるという理由で、一部のキリスト教宗派を取り込んで国家の宗教、つまり国教を仕立て上げていく。国教の主権者は君主あるいは行政官僚という世俗世界の統治者であり、国教の信徒は国内の被統治者のなかで統治者に寄り添う者に限られ、彼らのみが正当な国民として一定の政治的社会的権利が与えられる²⁾。英国においては、国教会以外の宗派信者は非国教徒とよばれ、19世紀後期に至るまで大学教育を受けることが禁じられ、国内においては政治的には当然のこと社会的にすら指導的地位・職位に就くことができなかった（年表参照）。

2. 展開（19世紀）

英国において産業技術が発展し、その理論的裏付けを得るための科学が進展していく。しかし、この過程において実際の貢献を為した人々、かれらは王立（国教会主が統括審査する）大学の学者・研究者ではなかった³⁾。かれら－実験技師、職人技術者、発明家、産業資本家－の多くは非国教徒で占められていた。また、かれらを周りからサポートするジャーナリスト、文筆家、扇動家の類いも非国教徒が多かった。

この時期、英国内ではホイッグ主義と称される安直な歴史修正主義が流行する。このホイッグ主義を信奉する作家・歴史小説家、戯作者が著した雑多な史観歴史書の類いが人々に読まれ受け入れられていった。かれらが共通して描く歴史は進歩史観の産物であり、「いわゆる“科学史”を例にとれば、中世は『暗黒時代』であって、その時代の知識は間違いだらけのものであったに違いないという安易な見方をまず前提とする。そうして、その時代に身を置いて考察しようとはしないで、今日の科学の眼鏡を通して過去を眺め、今日の科学への連なりが認められないような要素には注意を向けようとはしない⁴⁾。

中でも、J.W.ドレイパー⁵⁾とA.D.ホワイトは、自然科学の発展に介入したと彼らが考えるキリスト教の害悪についてことさらに主張し、このことが後の世に広く影響力を及ぼすようになった。

3. 顛末 (20世紀)

20世紀が近づくと、実証主義的方法が歴史学の中に定着してくる。前世紀の史観歴史書の価値は色あせ、歴史学の対象とは見なされなくなってくる。1920年代にもなればホワイトヘッドをして「科学と宗教との闘争は元来些細な事柄であるのに、不当にも大げさに言われてきた」⁶⁾と言わしめている。

このころになると科学者の社会的地位も確立され、かれらの側からの言説もあらわれる。中でもラッセルとシュレディンガー、これら当代一流の科学者の著した科学史論⁷⁾の影響は大きく、以後の科学史および科学論の雛形を与えた。そこでは、もちろん闘争史観のような極端な妄説は排除されているが、バイコン-ヴォルテールの枠組みは踏襲されており、それを発展させた進歩史観は維持されている。つまり、古代ギリシャを近代科学の源として中世を跨いで直結する操作をし、その結節点としてルネッサンス期を設定する科学史は、かれらのお墨付きを得て強化浸透していく。

おわりに

国教という政策によって個々人の信仰・信条ですら行政に取り込まれ、信仰宗派の別で制度的な差別と社会階級の固定が為された英国近代。19世紀に至ると、国教徒-非国教徒の間、抑圧する者と抑圧される者との間に生ずる軋轢と緊張が最大となる。

抑圧・被抑圧関係が深化した社会では、抑圧された人々が、不平不満を直接表明できずに、過去の時代に託けて抑圧する者を批判することはよくあることである。ホイッグ史観、進歩史観の底流が抑圧された人々のルサンチマンで形成されていたことは否めない。

しかし、これも行き過ぎればまた別の弊害を生むこともある。その典型が、進歩思想にとらわれたわたしたちの軽薄な歴史認識であろう。現在でも、キリスト教主義か科学主義かという類いの議論が続いているのも事実である⁸⁾。しかし、両者の噛み合いは“宗教と科学の対立”の枠組みを双方がア priori に共有するが故に生起する。もし、この噛み合いを成り立たせている枠組み自体が根柢希薄なものに過ぎなければ、これはなんと虚しい議論であろうか。

参考文献

- 1) D.C. リンドバーグ『近代科学の源をたどる』、高橋憲一(訳)、朝倉書店、2011。
- 2) 吉本秀之ら『科学と国家と宗教』、平凡社、1995。
- 3) 松永俊男『ダーウィンの時代』、名古屋大学出版会、1996。
- 4) 渡辺正雄『文化としての近代科学』、講談社、2000。
- 5) 中園嘉巳『J.W.ドレイパーと宗教と科学の闘争史』、『青山スタンダード論集』、5号、2010。
- 6) ホワイトヘッド『科学と近代社会』、上田、村上(訳)、松籟社、1981。
- 7) E. シュレディンガー『自然とギリシャ人』、水谷淳(訳)、筑摩書房、2014。
- 8) 井上順孝(編)『21世紀の宗教研究』、平凡社、2014。

関連年表

1559	英国教会統一法 (エリザベス 1 世)
1603	王権神授説 (ジェームズ 1 世)
1611	欽定英訳聖書
1660	王政復古 (チャールズ 2 世)
1661	(仏) 国家教会令 (ルイ 14 世)
1662	教式統一令
1673	審査法制定
1801	(仏) コンコルダート (ナポレオン 1 世)
1871	大学宗教審査律改正
1905	(仏) 政教分離法



今、世界の中で日本を研究すること

総合文化政策学部総合文化政策学科准教授

沖本 幸子

日本研究をしていて良かったと思うことの一つは、学生時代からたくさんの留学生に囲まれていたことだ。アメリカ、カナダ、イギリス、スペイン、ロシア、ブルガリア、ルーマニア、中国、韓国、ミャンマーなど、思えば実に多国籍の人がいた。異国からやってきた人たちが日本文化に興味を持ち、勉強してくれている…それだけで、どれだけ励まされたことだろう。そして、私自身の専門が芸能なので、一緒にいろいろな祭り、行事、そして、伝統芸能を見に行った。質問攻めにあうこともしばしばで、当然と思ってなんとなく眺めていたり、習慣のようになっているできごとをうまく説明できなかつたりすることがよくあった。「わかったつもり」ではない研究がしたい、外国の人たちにも通じる研究がしたい、そんな思いが今の私の原点になっている。

彼らが日本研究を志した理由もさまざまで、幼い頃、日本駐在のおじさんから送られてきた絵はがきを見て、遠くに私の知らない小さなきれいな国がある…と思って日本を夢見ていた人、演劇一家で歌舞伎役者、六代目歌右衛門の映像を見て感動して日本までやってきた人、西洋哲学を学んでいたのに軍国主義下の政策で日本の思想を学ぶはめになってやってきた人など、一人一人の留学生と向き合う中で、その国の文化や社会を垣間見ることができた。

今、一緒に学んできた友人たちがさまざまな国で、日本文化を教える立場になっている。

北米では、中国や韓国に圧倒される形で、アジア研究の中での日本の立場がどんどん弱くなっている。しかし、アニメや漫画、J-popへの興味をはじめ、ラーメンや寿司など日本食への関心は非常に高い。とりわけ西海岸の大学では、日本からの移民も多いせいか、日本文化全般への関心が高いと聞いた。大学院生が行う雅楽や狂言といった決して派手とは言えないテーマの講義にも学生が殺到しているらしい。日本文化ならなんでも知りたい、そういう空気があるのだという。そして、たとえば私の友人は、日本文化、古典文化への関心を高めるために、



ミャンマーにて

米国で圧倒的な人気を誇る忍者のシンポジウムを企画するなど、さまざまな仕掛け作りに余念がない。

一方、東南アジアのミャンマーなどでは欧米の文化研究が主で、日本の影はととても薄い。日本語を学ぶ人も少ないが、なんとか日本で学んだことを生かそうと、英語の教材を使いながら日本文化の授業をしたり、日本の大学と合同でのシンポジウムを開催したりして、日本との接点を作ろうとしてくれている。

国によっても大学によっても日本研究の位置付けや浸透具合は異なっているが、ただ一つ言えることは、みんな日本を思い、日々努力し続けてくれているということだ。そして、そうした地道な努力の中で、世界各地に日本に興味を持ち、日本語を話す学生たちが育っていく。

今、日本で日本研究に携わる一人として、こうした地道な営みを応援し、そして、日本文化のおもしろさ、日本研究の魅力を伝えていくことが私の研究の一つの軸になりつつある。もちろん、自分自身の研究の深まりなくして応援もなにもないけれど、日本と縁を持つ人がこの世界に一人でも増えてくれることを願いながら、さまざまな国の友人たちと一緒に歩いていきたい。

独裁政治を比較する

国際政治経済学部国際政治学科准教授

林 載桓



独裁政治と聞けば、何を連想するのでしょうか。何事も思い通りにできる独裁者、または市民に向かい無慈悲に暴力を振るう軍隊と警察の姿が頭に浮かぶのではないのでしょうか。民主化の波が世界に広がり、統治体制としての民主主義の地位が確立しつつある現在もなお、世の中には数多くの非民主主義国が存在しています。この点を確認するに遠くまで目を向ける必要はございません。隣国の北朝鮮と中国は、自他共に認める「独裁国家」だからであります。

問題は、民主主義国家がそうであるように、独裁国家の中にもいろんなタイプが存在し、またそのタイプの相違により、それぞれの独裁国家の政策や行動に大きなバリエーションが見られるということです。この点は、まさに中国と北朝鮮のあまりにも異なる経済状況を比較すればお分かりいただけると思います。民主主義の最低条件、つまり自由で競争的な国政選挙を欠如する点で共に独裁体制をとりながら、一方の北朝鮮は未だに餓死者が後を立たない世界有数の「貧困国」であるのに対し、他方の中国は今やそのくしゃみが世界経済に風邪を惹き起こす「経済大国」になっています。もちろん両国は人口や資源など、物理的条件が異なります。しかし忘れてはならないのは、同じ中国でも、1960年代初めには約3000万人が飢餓で死亡する事態が発生していたという事実です。では、どのような違いが現に両国の運命をこれほどまでに劇的に変えてしまったのでしょうか。そもそも独裁国家のどのような相違に注目すれば、こうした現実の多様性が説明できるのでしょうか。

このような問いを念頭に、さまざまな独裁国家の統治制度を比較検討し、そこで得られた知見を用い、とりわけ現代中国の政治経済の現状を説明することが、私の研

究テーマであります。具体的には、独裁国家の指導者、すなわち独裁者の行動がどれほど既存の制度や組織に影響されるのか（独裁者に与える制度的制約の性質と度合い）、また統治を行う上で独裁者は軍隊や警察といった暴力機構とどのような関係を結んでいるのか（統治手段として暴力に依存する度合い）、といった基準を以ってさまざまな独裁体制の共通点と相違点を見出し、その政治的、経済的帰結を探求しています。

昨年末に出版した初著書の『人民解放軍と中国政治』（名古屋大学出版会）は、こうした理論的、実証的な問題関心を、文化大革命期の中国政治を対象に検討したものです。具体的には、毛沢東と人民解放軍の関係を分析の中心に据え、当該時期の多様かつ重大な政治的、政策的帰結を一貫して説明しようと試みました。この作業を通じて、独裁者毛沢東の権能が頂点に達したとされる文革期にあっても、彼の戦略と行動はさまざまな制約を受けていたこと、そしてその中心に統治組織としての人民解放軍との関係が重要な部分をなしていたことを明らかにし、文革期とそれに続く改革開放時代の理解に役立てようと思いました。

中国も北朝鮮も、当分の間、内生的な民主化、つまり外部の衝撃によらない民主主義体制への自発的移行が起こる可能性は、極めて低いのではないのでしょうか。しかし、急激な体制転換を図らなくとも、政権のパフォーマンスを改善する方法は現体制の中に存在していると思います。独裁体制を比較すること、すなわち独裁政治の多様な現実を分析することは、体制の転換をただ待つよりは現実的な代案を提供でき、そこに研究の実践的意義があるのだと思っています。

2015年度 新規プロジェクト 研究紹介

総合文化研究部門 課題別研究部

株式市場に関する国際比較調査 ～投資家心理からのアプローチ～

プロジェクト代表

亀坂 安紀子 経営学部経営学科教授

株式市場は投資家の様々な心理的な要因によって大きく影響されている。にもかかわらず、株価変動の要因などについては、いまだ十分に明らかにされていない。本プロジェクトは、2013年にノーベル経済学賞を受賞したYale大学のロバート・シラー教授と共同で、日米比較可能な形で投資家調査を実施することにより、投資家心理の解明を進めようとするものである。

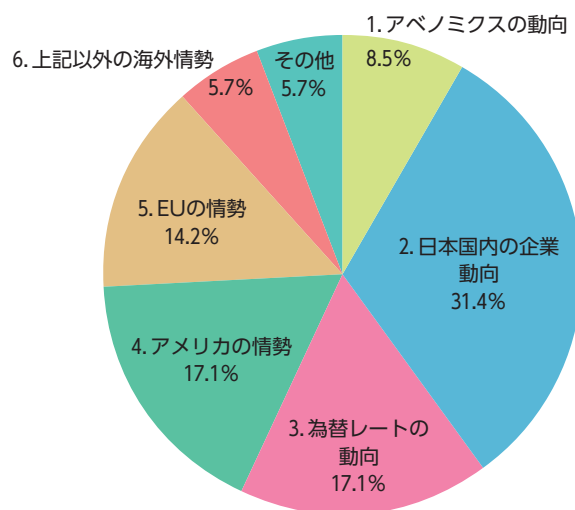
日本におけるこの投資家調査は、2013年度までは筒井義郎大阪大学名誉教授（現在、甲南大学特任教授）によって実施されてきたが、筒井教授の大阪大学定年退官に伴い、2014年度からは青山学院大学にて本プロジェクト代表者が中心となって実施している。総研プロジェクトへの応募も2014年度に行われ、本年度から採択されている。以上のような経緯があり、学外から筒井義郎教授にも客員研究員として、本プロジェクトに参加して頂いている。筒井教授以外の本プロジェクトの研究分担者は全員、青山学院大学の教員である。

本プロジェクトの成果として期待されることは非常に多い。まず、①ノーベル賞受賞者との共同プロジェクトを本学で実施すること自体、とても意味があることだと考える。調査票はシラー教授が20年以上前に設計し、かつ、日米で継続して実施されてきた調査である。また、②調査が開始された1980年代から世界のマーケットの代表であり続けた日本と米国で並行調査されていることの意味も大きい。③ファンドマネジャーやディーラーなどの専門家を対象として調査を実施しているため、相対的に情報優位にある投資家の市場見通しを把握することができるといったメリットもある。さらに、④過去の調査研究の結果は、論文、図書、学会報告、記者会見などでも公表されており、今後の調査研究結果についても、招待報告などの依頼がすでになっている。このため、様々な形で成果発表が期待される。

本調査の集計データおよび結果の概要を説明する報告書は、調査にご協力下さっている回答者の方々に郵送させて頂くとともに、青山学院大学の亀坂のホームページ上でも公表している。調査票発送から2ヶ月を目処にWeb上で公開しており、結果は順次アップデートされている。

本調査の特徴として、株価がファンダメンタルズ（基礎的な条件）と比較して、割高ないしは割安になっていないかといったことを継続的にチェックするといった役割が期待されている。今年8月からは、世界的に株価の変動が大きくなっているが、中長期的には、株価はファンダメンタルズにもとづき適正な水準に回帰するはずである。グラフは、今年6月に行った調査結果の一部を紹介しているが、今後の日本の株価の決定要因として最も影響力を与えるものとして、日本国内の企業動向をあげる回答が多かった。本調査の結果に関心を持たれたら、是非、アンケート結果の報告書を参照してほしい。

今後6か月間の日本の株価の先行きに最も大きな影響を与えるもの



総合文化研究部門 キリスト教文化研究部

贖罪思想の社会的影響の研究

プロジェクト代表

森島 豊 総合文化政策学部総合文化政策学科准教授・大学宗教主任

本研究は、キリスト教の信仰の中核にある贖罪思想の社会的影響を明らかにするものです。

キリスト教の信仰は社会に多くの影響を与えていますが、そのメカニズムを思想的にとらえているものは多くありません。中でも、イエス・キリストの十字架による贖罪信仰の内容がどのようにして社会的な影響に適応されていったのかは定かではありませんでした。なぜならば、信仰は極めて内的な個人的なものですので、それが社会的な影響になるプロセスが不明確なのです。社会的な影響を考えると、社会学的な側面にとらえたり、信仰と無関係な要素にとらえられることが多くあるのです。けれども、それでは歴史を形成した思想的動力をとらえることが難しい側面があります。むしろ、キリスト教独自の持っている力を考えるならば、信仰と切り離して考えることは難しいのです。

本研究では、キリスト教の信仰の中心にある、イエス・キリストの十字架による贖罪がいかにして社会的影響へとつながったのかを実証します。

まず、贖罪思想の展開と発展を、聖書の根拠と現代への影響の流れの中で捉えます。手順としては、①新約聖書が根拠とする贖罪に関わる旧約聖書の言葉が、旧約の民において本来どのように理解されていた言葉であり、その後どのように展開したのか、神学的に解釈史を明らかにします。その後、旧約聖書の贖罪理解が、イエス・キリストの十字架と結びついて理解されたことを、新約聖書を通して明確にします。

次に②贖罪の訳語であるAtonementという用語が、社会運動の思想的根拠となっていた歴史的経緯をたどります。特に、この造語を作り出したウィリアム・ティンダルからF.D.モーリスまでの時代の中で、この用語の理解の変遷を明らかにします。Atonementという言葉は、和解の訳語として用いられた造語でした。元来この用語には人格的な関係の回復という意味で用いられていたのです。それをイエス・キリストの御業に適應したときに、旧約聖書の燔祭の生贄による贖罪を表す言葉として用いられました。ところが、その後モーリスまでこの用語が持つ人格的側面が失われるのです。しかし、ピューリタンたちの信仰は、そこに人格的側面を保持していました。そのピューリタンの信仰運動は人権思想に影響を与えるのです。そこで、ピューリタンたちの贖罪信仰の位置づけを明らかにし、贖罪思想の人権思想への影響を解明する。中でも、これまで手が付けられていないピューリタニズム運動における贖罪思想と創造論の関係を通して、人権の法制化過程の思想史的研究を補強します。

また、これまでのイギリス贖罪論史と社会運動との関係を明らかにしたものがありません。19世紀贖罪論に関する神学研究が盛んになると同時に、社会運動も活発になりました。従来の研究はこの両者の関係性を検討したものがないのですが、本研究ではAtonementの言語学的考察と神学思想史研究を通して、贖罪論研究の発展と社会運動への展開のメカニズムを解明します。

最後に、この贖罪思想がアジアの発展途上国の社会改良にどのような影響を与えたのかを明らかに致します。

本研究は、贖罪研究の新たな視点を開拓するばかりでなく、社会事業を研究している様々な研究分野の研究者、さらには人権問題や社会改善を扱っている活動家やNPOの人々に、思想的観点から運動の分析、課題と展望を提供するものとなります。このことは、本学の建学の精神である「地の塩、世の光」の実践を神学思想的に基礎付ける思索であり、青山学院大学がこの方面における学問的考察に大きく貢献することになると確信しています。

領域別研究部門 自然科学研究部

大学生の健康増進のためのヘルステスト開発の試み

プロジェクト代表

安井 年文 教育人間科学部教育学科教授

研究目的

社会生活を営む上で心身ともに健康であるという状態はとても重要な要素として認識されています。その「健康」を下支えにして活力のある生活を営むことが可能であると考えられます。その健康を作り上げるためには「からだ」と「こころ」に焦点を当てて個別的な特性を把握し、その後、総合的にそれぞれを身につける必要があると考えられます。そのために「からだ」、「こころ」の総合的なヘルステスト作成し、試行することで健康を増進させる上で取り組まなければならない課題を鮮明にし、さらに効果的な対処法をとることが出来ると期待されます。このテストの大きな特徴として身体運動（テニスやゴルフといった技術性の高いスポーツ種目を中心に）における出来る“よろこび”の認知度についての調査を基に作成していきます。この研究で対象としている大学生の年代は社会人になる一步手前の状態の者達であり、発育・発達的にも体力が最も高いとされています。それはヘルスプロモートのためのスキルを身につける可能性の最も高い時期であると認識できます。そこで本研究では大学生を対象としてヘルステストを作成し、その試行を行うことでそのテストの妥当性を検証し心身の健康の評価を客観的に実践できるようにしていくことを目的とします。

本学への貢献度

この研究によるヘルステストの発案とその妥当性の検証をまず本学の学生に試用していきます。これらの研究成果を最初に本学大学生が享受することはヘルスプロモートのためのスキルを身につけていくことにより、いち早くヘルスプロモートに取りかかることを可能にしてくれると期待できます。そのことで本学学生をより良い人材として社会に送り出していくことが出来ると期待されます。

共同研究計画及び方法

〈第1段階〉平成27年度

以下の3つの方法を用いて研究対象者（大学生）の「からだ」、「こころ」の健康についての調査をします。

- ①テニス（对人的種目）、ゴルフ（個人的種目）といったカテゴリーの相違したスポーツ種目でありながら特殊な運動技術の介在が必要とされるという共通点を持つそれらの授業のなかで、学生の運動技術の習得においてその技術の絶対的な習熟度に拘らず運動技術の習得満足度によって創造される「出来る」および「出来ている」という充実感（よろこびの認知度）を客観的に評価していきます。これは単純な身体運動のみで評価される健康とは大きく異なり個々の運動課題に対しての心理的満足度を加味したものです。研究分担者となる8名全員は大学での体育系の授業の実践の中でその習熟度についての満足度のデータを収集し、データを統合します。その後6名の研究分担者でデータ分析し運動技術の習得に関しての客観的な評価法を作成します。
- ②対象者となる学生の身体的な健康度を健康診断及び意識アンケートを用いて医学的な数値をもって客観的に評価します。これは毎年、保健管理センターで実施している健康診断と大学体育授業での「健康スポーツ演習」で実施している体力診断テストを併用して研究分担者8名が全面的に調査を行っていきます。
- ③大学生活における心理的な健康度をアンケート等で調査を行い客観的な評価を行います。これは②で行う健康意識アンケートとは異なり、メンタルヘルスを中心とした内容を研究分担者8名でそれぞれの体育授業の中で実施していきます。

〈第2段階〉平成27年度

前段階で行った調査を基に①身体運動の技術習熟を総合的に判断できる評価法を作成②心理的健康度を総合的に判断できる評価法を作成の二つの評価法を作成していきます。

〈第3段階〉平成28年度

前段階を経て集約される身体運動の技術習熟度と心理的健康度を抽出できる評価法に統合し、その評価法を対象者である本学学生に適用し、そのヘルステストの妥当性を調査していきます。そのテストの結末部にはヘルスプロモートのための指針が明示され、個々のその後の具体的な生活スタイルの提示をすることができると考えられます。その評価法の妥当性が実証された後、そのヘルステストを他の対象者に適用するために他大学へ同様なテストを実施し、その妥当性をさらに検証することを行います。

成果公表の展望

成果についてはまず総合研究所発行の研究誌に掲載していくことを第一とし、その後として大学体育学等の大学体育の研究に寄与する公的機関の発行する研究誌に投稿し、その成果を改めて問う形をとっていきたいと考えます。そのヘルステストの妥当性が認められた後に、さらに他の大学などのフィールドに対して流用してその成果を広げていきたいと考えます。



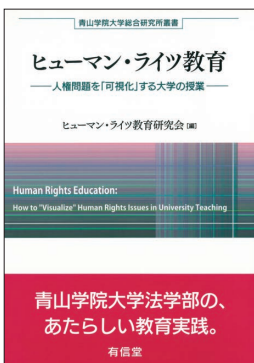
プロジェクト名：文化資源マネジメント論に資する都市農村交流の研究

東北の震災復興と今和次郎 ものづくり・くらしづくりの知恵

黒石 いずみ 著

平凡社 2015年3月30日刊行 3,000円(税別)

総合研究所の都市と地域の文化資源交流研究から始まり、東日本大震災後の被災地活動に至る共同研究を、背景となる東北地方の災害復興史と共にまとめた書。学生たちとのワークショップと、戦前から戦後にかけて今和次郎や羽仁もと子らによって行われた生活改善や工芸、住宅調査、農村生活改善事業とを対比しつつ、現地の人々の地域文化を尊重し、その社会資本を補強する復興事業の意義とその具体的方法を検証した。日常生活や歴史的習慣に潜む防災などの豊かな知恵を掘り起こす研究の試みでもある。(プロジェクト代表 黒石いずみ)



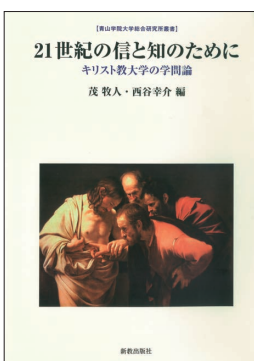
プロジェクト名：人権教育の手法に関する多国間分析と青山モデルの構築

ヒューマン・ライツ教育—人権問題を「可視化」する大学の授業—

ヒューマン・ライツ教育研究会 編

有信堂高文社 2015年3月30日刊行 2,800円(税別)

本書は、総研プロジェクトの「研究叢書」の一冊ではあるが、その内容は一般的な研究書とはやや異なっている。その内容の中核におかれるのは「研究」ではなく「授業ドキュメント」、すなわち、私たちの研究の結晶として本学法学部のカリキュラムに加えられたヒューマン・ライツ関係授業の実践報告であり、いわゆる「研究論文」は、その周辺に配置され、それを補完する役割を担っている。私たちプロジェクト参加者は、この3年間、「研究」と「実践」を切斷しないこと、つまり、研究は常に「いま、ここにいる」学生たちの人間的成長を促す授業の開発に資するものでなければならぬと心がけてきた。上述のような本書の構成は、そうした本プロジェクトの特質をよく表すものであり、また、そこにこそ私たちの願いと主張が込められているのである。(プロジェクト代表 大石泰彦)



プロジェクト名：キリスト教大学の学問体系論の研究

21世紀の信と知のために キリスト教大学の学問論

茂 牧人、西谷 幸介 編

新教出版社 2015年2月28日刊行 5,000円(税別)

本書は、総合研究所の研究プロジェクト「キリスト教大学の学問体系論の研究」の2010年度から13年度にわたる4年間の研究成果としての書き下ろし論文集である。その趣旨は、青山学院大学を範例とするキリスト教大学の存在とその意義を明確にすることにある。本書は、青山学院が「寄付行為4条1項」を大学で営まれている学問全体の統合原理としているので、その意義を明らかにした後、特に翻訳本を出版したティリッヒ、パネンベルク、ハワーワスの神学や、19世紀終わりからの共同体形成の神学、ノヴァーリスやシェリングの学問論、現象学と解釈学の学問論、社会倫理と学問論、キリスト教大学の教育の諸問題と提言を包括的に論じた論文集である。(プロジェクト所員 茂 牧人)



総合研究所叢書 新刊本紹介



プロジェクト名：企業戦略と経営機能別戦略との影響関係の分析

「日本型」戦略の変化 経営戦略と人事戦略の補完性から探る

須田 敏子 編

東洋経済新報社 2015年3月12日刊行 4,000円(税別)

「失われた20年」との言葉が示すように、かつて有効に機能した日本型と呼ばれる戦略が、環境変化によって有効性を失っている。本書では日本企業が置かれた環境変化をより具体的に知るために、日本という国レベルと産業レベルの2レベルの環境レベルを設定。企業の置かれた環境と経営戦略・人事戦略の2側面に焦点をあて、分析している。産業として取り上げたのは、電機・製薬・金融・流通の4産業。競争環境・規制環境・地域独自性など様々な面で異なる4産業において経営戦略・人事戦略がなぜ、どのように変化しているを追及し、戦略変化の多様で複雑な動きを捉えた研究書である。(プロジェクト代表 須田敏子)



プロジェクト名：財務報告の利用者から見た国際財務報告基準の意義と課題

利用者指向の国際財務報告

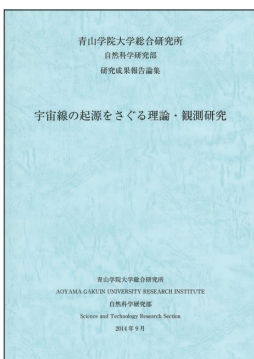
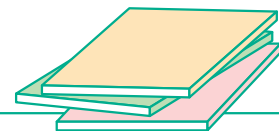
橋本 尚 編著

同文館出版 2015年3月30日刊行 4,200円(税別)

本書は、青山学院大学総合研究所の研究プロジェクト「財務報告の利用者から見た国際財務報告基準の意義と課題」(2012-2013年度)の成果を『総合研究所叢書』として刊行したものである。本書の特徴は、ディスクロージャーの本来の受益者である財務報告の利用者の視点に立って、わが国における国際財務報告基準(IFRS)導入をめぐる諸課題について、理論的、制度的、実務的な観点から総合的に検討している点にある。また、アンケート調査などの結果に基づき、IFRS導入に関する財務報告作成者と利用者との意識のギャップを明らかにするとともに、利用者指向の国際財務報告のあり方を模索している。(プロジェクト代表 橋本 尚)

総合研究所

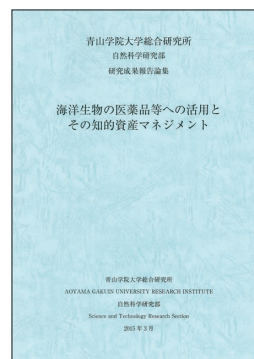
研究成果報告論集紹介



プロジェクト名：
宇宙線の起源をさぐる理論・
観測研究

『宇宙線の起源を さぐる理論・観測 研究』

2014年9月30日刊行



プロジェクト名：
海洋生物の医薬品等への活用と
その知的資産マネジメント

『海洋生物の医薬品等 への活用とその知的 資産マネジメント』

2015年3月31日刊行

お知らせ

●2014年度 総合研究所 研究成果（市販本・研究成果報告論集）

市販本

研究部	研究プロジェクト名	書名	出版社	代表者
課題別	文化資源マネジメント論に資する都市農村交流の研究	東北の震災復興と今和次郎ものづくり・くらしづくりの知恵	平凡社	黒石 いずみ (総合文化政策学部教授)
	人権教育の手法に関する多国間分析と青山モデルの構築	ヒューマン・ライツ教育—一人権問題を「可視化」する大学の授業—	有信堂 高文社	大石 泰彦 (法学部教授)
キリスト教文化	キリスト教大学の学問体系論の研究	21世紀の信と知のためにキリスト教大学の学問論	新教出版社	西谷 幸介 (国際マネジメント研究科教授)
社会科学	企業戦略と経営機能別戦略との影響関係の分析	「日本型」戦略の変化—経営戦略と人事戦略の補完性から探る	東洋経済 新報社	須田 敏子 (国際マネジメント研究科教授)
	財務報告の利用者から見た国際財務報告基準の意義と課題	利用者指向の国際財務報告	同文館 出版	橋本 尚 (会計プロフェッション研究科教授)

研究成果報告論集

研究部	研究プロジェクト名	タイトル	代表者
自然科学	宇宙線の起源をさぐる理論・観測研究	宇宙線の起源をさぐる理論・観測研究	山崎 了 (理工学部准教授)
	海洋生物の医薬品等への活用とその知的資産マネジメント	海洋生物の医薬品等への活用とその知的資産マネジメント	木村 純二 (理工学部教授)

●2015年度 総合研究所 成果刊行プロジェクト

研究部門	研究部	研究プロジェクト名	代表者
総合文化	キリスト教文化	3.11以降の世界と聖書—言葉の回復をめぐる	福嶋 裕子 (理工学部准教授)
領域別	人文科学	現代詩・演劇と戦争・紛争・災害—癒しの倫理と表現の探求	伊達 直之 (文学部教授)
	社会科学	ラテンアメリカにおける地域統合・地域主義の新たな展開	幸地 茂 (地球社会共生学部教授)
		国際刑事法の形成と日本法の受容・発信についての基礎研究	新倉 修 (法務研究科教授)
	自然科学	機能性分子骨格ジアリールポリインの電子励起状態	鈴木 正 (理工学部教授)
数学系講義を補完する自習システムの構築		寺尾 敦 (社会情報学部准教授)	

●2015年度 総合研究所 進行中プロジェクト

研究部門	研究部	研究プロジェクト名	研究期間	代表者	所員
総合文化	課題別	青山キャンパス防災時空間情報システムの開発研究	2013-2015年度	岡部 篤行 (総合文化政策学部教授)	日吉 久礎 杉浦 勢之
		タイ人日本語学習者の学びを支援する - 書く能力・話す能力向上へ向けたICT活用と日本語教育のコラボレーション -	2014-2016年度	稲積 宏誠 (社会情報学部教授)	宮治 裕 寺尾 敦 大野 博之 Kanokwan Laohaburanakit KATAGIRI 萩原 孝恵 Iketani Kiyomi
		自校史研究と教育実践モデルの開発 - 青山学院史研究 -	2014-2016年度	杉浦 勢之 (総合文化政策学部教授)	長谷川 信 梅津 順一 杉谷 祐美子 シュー士戸 ポール 小林 和幸 伊藤 真利子 酒井 豊 浅田 厚志 佐々木 竜太
		株式市場に関する国際比較調査 ~投資家心理からのアプローチ~	2015-2017年度	亀坂 安紀子 (経営学部教授)	高橋 文郎 小林 孝雄 島田 淳二 芹田 敏夫 筒井 義郎
	キリスト教文化	贖罪思想の社会的影響の研究	2015-2017年度	森島 豊 (総合文化政策学部准教授)	大島 力 高砂 民宣 須田 拓
領域別	人文科学	英日語の「周辺部」とその機能に関する総合的対照研究	2014-2015年度	小野寺 典子 (文学部教授)	澤田 淳 DIAS, J.V. Elizabeth C. Traugott 東泉 裕子
		“近世”とは何か - 世界史的考察 -	2014-2015年度	武内 信一 (文学部教授)	青木 敦 狩野 良規 佐伯 真一 大屋 多詠子 岩田 みゆき 秋山 伸子 渡辺 節夫
	自然科学	原子を用いた新量子技術創成のための基礎研究	2014-2015年度	前田 はるか (理工学部教授)	北野 健太 水谷 由宏
		英語化授業における日本語注釈つき学習教材の半自動生成と、当該教材を用いた学習促進の研究	2014-2015年度	鷲見 和彦 (理工学部教授)	戸辺 義人 佐久田 博司 LOPEZ, Guillaume REEDY, D.W.
		大学生の健康増進のためのヘルステスト開発の試み	2015-2016年度	安井 年文 (教育人間科学部教授)	井上 直子 遠藤 俊典 加藤 彰浩 有川 星女 宮崎 純一 田村 達也 片岡 悠妃 吉田 政幸 北村 哲

総合研究所施設利用案内

総合研究所では、プロジェクトの研究活動に利用できる研究室・共同機器備品等の貸し出しを行っております。ご利用にあたっては、総合研究課にて予め予約をお願いいたします。

研究室

プロジェクトの研究会等にご利用ください。

総合研究所ビルディング（14号館）2階に、研究室(1)および(2)の2部屋があります。

利用時間：月～土曜日 … 9：00～22：00

日曜日・祝日
本学が定める休日 } … 9：00～21：00

*但し、年末年始および夏期一斉休暇などの除外日があります。

総合研究所(1) Research Institute

〈研究室1〉



収容人数：14名

総合研究所(2) Research Institute

〈研究室2〉



収容人数：24名（最大30名まで）

共同機器備品

プロジェクトの研究会および講演会開催用としてノートPC、プロジェクター、スクリーン、ポインター、デジタルカメラ、ICレコーダーをご用意しております。

予約方法

総合研究課窓口にて直接お越しいただくか、メール（souken@aoyamagakuin.jp）もしくはお電話（直通：03-3409-7472、または内線：12119）にて、日時等をお知らせください。先着順にて受け付けさせていただきます。

今号は「宗教と科学」を特集記事としてNEWS SOKENをお届けします。近代以降の定番テーマである「宗教と科学」の問題をこの限られた紙面のなかで扱いきれないことは十分承知の上でありますし、このテーマのもとに数多くの文献や議論が歴史に敷き詰められてきましたが、わが国にとっても、青山学院にとっても、さらには総合研究所にとっても、様々な意味で節目を迎えようとするこの年に、改めて「宗教と科学」を話題にしたことは意義深いと言えます。昨年の暮れには、日本でも”God’s not dead”（邦題「神は死んだのか」）という映画が話題になりました。

このテーマ「宗教と科学」はとりもなおさず、「宗教と学問」「宗教と文化」「学問と文化」、さらには「宗教系大学とその学問体系」「建学の精神とその教育研究」の問題でもあり、古くからのテーマでありつつ、じつに繰り返し問われるべき今日的テーマでもあります。近代科学は、宗教をとかく文化領域の事象として含括しようとしてきましたが、近年では宗教と科学は互恵的關係・相互補完関係であることが多く指摘され、「宗教と科学」はそれ自体が学問の一分野として独自発展を始めています。さらに科学と道徳・倫理の問題、無神論や多神教からのアプローチ、そしてそれらには国家や世論も絡み合って複雑化し、さらに、これらの議論が政治的文脈のなかに包含されてしまうことによって益々複雑怪奇現象を引き起こす時代に突入しています。もはや単純な二律背反、あれかこれかで議論できるものではなくなりました。科学がカルト化することすら起こっています。

それでも未だに両者の対立・闘争イメージは広く影を落としていて、とかく宗教と科学の分離、もしくは科学の宗教からの自立こそが近代学問の最先端理解と捉えられがちであり、とくにわが国ではそうした感覚や偏向が顕著でもあります。政教分離原則を取り扱うような感覚で「宗教と科学」を強硬に住み分けをし、宗教が科学に向き合うことを嫌忌するきらいもあります。しかし近年の社会状況、自然災害、そこで生きる人間のあり方を見るにつけても、分離よりも結合、対立よりも対話が求められていると感じざるを得ません。これほどに価値観が多様化するなかであって、むしろ宗教と科学の対話や接近が急速に求められていると言えるでしょう。諸学の存立原理についても再考すべきときが来ているように思えます。規範や存立原理を失った学問は、結局のところ歴史に対して無防備と無責任にならざるを得ないからです。

戦後70年を迎えたこの年、民主主義の問い直しが起こっています。学問の自由と同時に学問の権威と責任が求められています。この時代、学問の府としての大学、なかんずくデモクラシーのバロメータでもある私立大学での研究活動には、いったい何が求められているのでしょうか。今号のNEWS SOKENがいくらかでも「宗教と科学」の課題や大学のあり方に向き合う契機になればと願うところです。合わせてお二人の教員の研究紹介、今年度新規プロジェクト研究の紹介、昨年度の総合研究所の研究成果の一部も掲載いたしました。いずれも本学から歴史や社会に問いかける労作であり、世の評価を期待するところです。今回執筆の労をとってくださった先生方に心より御礼申し上げます。（伊藤 悟）



青山学院大学総合研究所

青山学院スクール・モットー

地の塩、世の光

The Salt of the Earth, The Light of the World

(マタイによる福音書 第5章 13～16節より)

NEWS SOKEN Vol.15

2015年10月31日発行

編集 青山学院大学総合研究所編集委員会

発行 青山学院大学総合研究所
所長 浅井 和春
〒150-8366 東京都渋谷区渋谷4-4-25
TEL. 03-3409-7472 FAX. 03-5485-0780
URL : <http://www.ri.aoyama.ac.jp>
E-mail : souken@aoyamagakuin.jp

印刷 ヨシダ印刷株式会社